

## 332 関西空港周辺域のメバル追跡-1

・米田佳弘・佐々木雅人(関空)・向井幸則・中村憲司(シャトー海洋調査)・坂本亘(京大院農)・荒井修亮(京大院情報)

【目的】 関西国際空港島の護岸の大部分は、環境共生型の緩傾斜護岸で施工されている。現在、当護岸にはホンダワラ類やカジメ等の藻場が発達し、多種多様な魚介類が生息している。護岸の周辺は、大阪府漁業調整規則によって漁業が禁止されているが、護岸に生息する魚類の一部は、生活史のある時期に周辺海域に移動・分散し、周辺の漁業資源の増加に寄与している可能性がある。本研究は、同海域周辺の重要磯根資源であるメバルに注目し、護岸域で成長した幼魚が護岸で発生する流れ藻に追随して周辺海域に移動・分散する状況の把握を目的とした。

【方法】 緩傾斜護岸上のホンダワラ類(シダモク、タマハハキモク)を刈り取り人工的な流れ藻を4個作成した。この人工流れ藻それぞれに、人工衛星を介して位置情報が得られるアルゴス発信器4基を装着した。平成12年5月23日に下げ潮時を選び、空港島の南東端の海域に放流した。また、6月13日に同所から刈り取ったホンダワラ類に、直径5cmのウキを装着し、100個の流れ藻として同島の南東端に放流した。加えて、関空島の南側数kmの範囲内で、自然に発生した流れ藻をマルチネットで採取し、流れ藻に追随している幼魚を計数した。

【結果】 アルゴス発信器を装着した流れ藻は、空港島の西側の海域を北上し湾中央へ向かう経路(1個)と、同じく北上した後に貝塚市の海岸に向かう経路(1個)、並びに空港島の南へ向かう経路(2個)を取った。ウキを付けた100個の流れ藻の内、14個が大阪湾および播磨灘の海岸に漂着した。マルチネットで採取した流れ藻(32個)に追随していた幼魚は合計157尾で、その内メバルは136尾であった。空港島で発生する流れ藻の総量を護岸の藻場面積から求め、この値を基に空港島から移動・分散するメバル幼魚の尾数を推定すると、1年間で数十万尾と算出された。